止行者と観行者の対立

—現代タイ仏教界の瞑想法をめぐる—

K. PHRAPONGSAK

I. 序 論

現代上座仏教で最もポピュラーな瞑想実践法は、現象をありのままに観察する「ウィパッサナー瞑想法」と呼ばれるものであり、「観」(vipassanā)を重視して行ずる「観行者」(vipassanāyānika)という行者である。一方、仏教の伝承では「観」と並んで、心を一点に集中する「止」(samatha)と呼ばれる瞑想法も存在し、「止」を重視して行ずる「止行者」(samathayānika)という行者である。これら二つの瞑想法を修習するのが仏教の正統的な立場であると考えられる。

現在、止観を指導している瞑想指導所は上座仏教の国々に増え広まった。その中で、タイ国の瞑想指導所は全国に1151ヶ所あり、様々な瞑想法を指導しているが、その中には主な瞑想指導寺院系がある。それは、⁽¹⁾① マハーターツ寺院系、② 東北地方寺院系、③ パクナム寺院系である。この三つの寺院系、①は「観行者」、②と③は「止行者」の瞑想法を指導している。しかし、この「止行者」と「観行者」の間で対立が起き、以下のように相互に批判しあっている。

「止行者」は、「観」を修習する前に、「止」特に「四禪」(jhāna)を前段として修習しなければならない。そうでなければ、「観」の修習に入ることができないと主張する。これに対して「観行者」は、「観」が「慧」(paññā)の段階であり、悟りを開き涅槃に至る不可欠な修習には「四禪」

の段階に到達していない「刹那定」(khaṇikasamādhī)でも「観」の前段として修習することができる。「四禅」に拘り過ぎると悟りの妨げとなると批判する。一方「止行者」は、勿論「観」は涅槃に到達する不可欠な修習であるが、その「観」は「四禅」に到達しなければ、「修慧」(bhāvanāmaya-paññā)に得られる「聖」(ariya)・「無漏」(anāsava)や「出世間」(lokuttara)の段階でなく、ただ「思慧」(cintāmaya-paññā)に得られる「有漏」(sāsava)や「世間」(lokiya)の段階に過ぎない「慧」であり、有漏・世間の「観」は、現象をありのままに理解するだけで、「如実智見」(yathābhutañāṇadassana)ではないと反論する。

以上からは、「止行者」であれ「観行者」であれ、止観をともに実修すると見られる。また、「観」は悟りを開き涅槃に至る不可欠な修習であると両行者とも認める。ただし、「止」に対する必要性は両行者の観点がかなり異なる。つまり、「止行者」の「止」は「四禅」を必要とするが、「観行者」の「止」は「四禅」を必要とせずに「刹那定」を必要とする。このように、止観に対する観点、特に「四禅」の必要性が異なるため、両行者に対立が生じていると見られる。しかし、これは正誤問題なのか、それとも違う時代の文献を取り扱うがゆえの問題なのか、という疑問が残る。ゆえに、本稿は初期経典から註釈文献に至るまでのパーリ文献を精査し、両行者の現代の実践とともに、文献的、実践的に証明して論じなければならない。また、その結果をもって現代タイ仏教における両行者の対立をめぐる問題を解決させたいと願う。

II. 〈止行者・観行者〉と〈定〉

現代上座仏教界がよく用いる「止行者」・「観行者」という二行者、及び「安止定」(appanāsamābhī)・「近行定」(upacārasamādhī)・「刹那定」(khaṇikasamādhī)という三定は、註釈文献時代において新たな術語としてはじめて現れるようになった。まず、Buddhaghosa(5世紀頃)の『清

浄道論』(Visuddhimagga)⁽²⁾を考察しよう。

『清浄道論』は23品からなり、戒・定・慧の三学の順序に説かれている。まず、問題の「止行者」・「観行者」に関しては、第18品の「見清浄品」(Ditthivisuddhi-niddesa)で説かれる。そこでは、

Taṃ sampādetukāmena samathayānikena tāva, ṭhapetvā nevasaññānāsaññāyatanaṃ, avasesarūpārūpāvacarajjhānānaṃ aññatarato vuṭṭhāya vitakkādlni jhānangāni taṃsampayuttā ca dhammā lakkaṇarasādivasena pariggahetabbā. (Vis. 587)

まず、その〔見清浄〕を成就しようとする止行者は、非想非非想処を除いて、残りの色・無色界(繫)禅の中のどれか一つから出定して、尋などの諸々の禅の支分、及びそれと結び付いた諸々の法を相や味などの力によって把捉すべきである。

と説明されているため、「止行者」は「止」を修習して「四禅・第七定以下の無色定」に至ったものである。そして、

Suddhavipassanāyāniko pana ayam eva vā samathayāniko Catudhātuvavatthāne vuttānaṃ tesam tesam dhātuparigahamukkhānaṃ aññataramukhavasena sankhepato vā vitthārato vā catasso dhātuyo parigañhāti. (Vis. 588)

また、純観行者あるいはこの止行者は、四界差別において説かれた⁽³⁾、それぞれの界を把捉する門の中のどれか一つの門により、あるいは、簡略か詳細かで四界を把捉する。

と説かれる。ここで、「観」のみを修習することを強調する「純観行者」(suddhavipassanāyānika)という言葉が現れる。一般に「純観行者」は「定」の「四十業処」(kammaṭṭhāna)⁽⁴⁾に関わらないと見なされているが、

ここでは「純観行者」が「四十業処」中の「四界差別」に関わるとされている。

また、「安止定」・「近行定」・「刹那定」という三定は、どのようなものであるかについて、まず以下のように説かれる。

Channaṃ anussatiṭṭhānānaṃ maraṇassatiyā, upasamānussatiyā, āhāre paṭikūlasaññāya catudhātuvavatthānassā ti imesaṃ vasena laddhacittkekaggatā, yā ca appanāsamādhīnaṃ pubbabhāge ekaggatā: —ayaṃ upacārasamādhī. *Pāṭhamassa jhānassa parikammaṃ paṭhamassa jhānassa anantarapaccayena paccayo* ti ādi-vacanato pana yā parikammānantarā ekaggatā: —ayaṃ appanāsamādhī ti evaṃ upacārappanā vasena duvidho. (Vis. 85)

「六随念処、死念、寂止随念、食厭想、四界差別」というこれらによって得られた心一境性、そして、諸々の「安止定」の前段階における一境性、これが「近行定」である。また、「初禪の予備は初禪の無間縁としての縁となる」云々の言葉から、予備の直後なる一境性、これが「安止定」である。ということで、このように「近行・安止」によって二種類となる。

ここで「安止定」は「初禪以上の段階」の定であり、「近行定」は「初禪の前段階」であると確認される。また、「諸蓋の捨断による定心」である「近行地」(upacārabhūmi)を「近行定」と呼んでいるところがあるため、⁽⁵⁾「近行定」は「諸蓋を捨断した初禪の前段階」となる。このようにして、『清浄道論』は「四禪」に至る段階(安止定)と、それ以下の段階(近行定)を認めると見られる。ただし、上述の説明には「刹那定」が現れない。また、『清浄道論』には「刹那定」の術語が一ヶ所しか見出されない。⁽⁶⁾そこでは「止行者」であれ「観行者」であれ止観と関わらないとされている。⁽⁷⁾さらに、「定の種類」でも「刹那定」は現れないのである。⁽⁸⁾

「刹那定」がよく普及されるのは、Dhammapāla(6世紀頃)の『清浄道

論』の註釈書である『清浄道論註』(*Visuddhimagga-Mahāṭīkā: Paramatthamañjūsā*) である。そこでは、「禪あるいは禪の近行における依止によって、観を實踐する者は止行者といわれる」(*Jhāne, jhānūpacāre vā patitṭhāya vipassanaṃ anuyuñjantassettaṃ nāmaṃ, tena samathayānikena*) と説明する⁽¹⁹⁾。そして、「観行者のことを、止によらないという点で純観行者という」(*vipassanāyānikassa pana samathaṃ anissāyāti āha "suddhavipassanāyāniko" ti*) と説明する。それゆえに、ここで「止行者」は「安止定」あるいは「近行定」を修習するものである。一方「純観行者」は、完全に「止」によらないとも考えられるが、実はそうではなく、「止」によらない「純観行者」といえども、「刹那定がなければ、観は生成しない」(*na hi khaṇikasamādhim vinā vipassanā sambhavati*) と説明するところがあるため、「安止定」・「近行定」より下位の瞬間的な「刹那定」によって「観」を修習するものである。

以上、「止行者」・「観行者」と、「安止定」・「近行定」・「刹那定」との関係をもとめていえば、註釈文献時代において『清浄道論』では「止行者」は「四禪」・「無色定」の段階に至る「安止定」を修習するものであるが、「観行者」はどの段階に至るのかが判明してない。その後、『清浄道論註』では「止行者」は「安止定」だけでなく「四禪」に至らない「近行定」を修習するものに対して、「観行者」は「安止定」・「近行定」より下位の「刹那定」を修習するものとされている。

III. <止行者・観行者>の展開

それでは、「止行者」・「観行者」の註釈文献時代以前の姿は何であろうか。これに関して注目すべきは、三蔵註釈文献(*Aṭṭhakathā*) に述べられている「四念処」と「渴愛行者」(*taṇhācarita*) ・「見行者」(*diṭṭhacarita*) と「止行者」・「観行者」との関係である。そこでは、四念処の第一「身随観念処」(*kāyānupassanā-satipaṭṭhāna*) と第二「受随観念処」(*vedanānupassanā-*

satipaṭṭhāna) は、「渴愛行者」及び「止行者」へと導き、四念処の第三「心随観念処」(cittānupassanā-satipaṭṭhāna) と第四「法随観念処」(dhammānupassanā-satipaṭṭhāna) は、「見行者」及び「観行者」へと導くべきであると説かれる。この点から見れば、「渴愛行者」は「止行者」と、「見行者」は「観行者」と関係すると見なすことができる。しかし、残念ながらその関係に関して、註釈文献においてこれ以上は説明されていない。註釈文献より先に成立した『導論』(Nettipakaraṇa)・『藏釈』(Peṭakopadesa) に遡ってみると、「渴愛行者」・「見行者」の説明があり、それは次のようになる。

Diṭṭhacaritā ito bahiddhā pabbajitā attakilamathānuyogam anuyuttā viharanti. taṇhācaritā ito bahiddhā pabbajitā kāmesu kāmasukhalli-kānuyogam anuyuttā viharanti. (Net. 110)¹⁰

見行者である外道の出家者たちは、自己の疲苦に専念して住する。渴愛行者である外道の出家者たちは、諸欲に対する欲楽に専念して住する。

と述べられる。ここでは、「渴愛行者」が「欲楽に専念するもの」となり、「見行者」が「自己の疲苦に専念するもの」となる。阿含・ニカーヤにおいて、この術語としての「渴愛行者」・「見行者」は見られないが、「欲楽に専念するもの・自己の疲苦に専念するもの」は『転法輪経』などの中道に関する文脈に見られる。¹⁰つまり、「渴愛行者」・「見行者」は阿含・ニカーヤ時代において「欲楽に専念する者」・「自己の疲苦に専念する者」との表現から、アビガンマ文献と註釈文献との中間時代の『導論』及び『藏釈』に新たな術語として展開し、註釈文献時代まで受け継がれてきたことになる。そして、「渴愛行者」・「見行者」と止観との関係は、次のように説かれる。

Tattha catasso paṭipadā, cattāro puggalā. Taṇhācarito mando satindriyena dukkhāya paṭipadāya dandhābhīṇṇāya niyyāti satipaṭ-

ṭhānehi nissayehi. Taṇhācarito udatto samādhindriyena dukkhāya paṭipadāya khippābhiññāya niyyāti jhānehi nissayehi. Diṭṭhacarito mando viriyindriyena sukhāya paṭipadāya dandhābhiññāya niyyāti sammappadhānehi nissayehi. Diṭṭhacarito udatto paññindriyena sukhāya paṭipadāya khippābhiññāya niyyāti saccehi nissayehi.

Ubho taṇhācaritā samathapubbaṅgamāya vipassanāya niyyanti rāgavirāgāya cetovimuttiyā. Ubho diṭṭhacaritā vipassanāpubbaṅga-mena samathena niyyanti avijjāvirāgāya paññāvimuttiyā. (Net. 7)

そこで、四道があり、四人がいる。鈍い渴愛行者は、苦行道遅通達のために、念根によって〔四〕念処によって出発する。鋭い渴愛行者は、苦行道速通達のために、定根によって〔四〕禪によって出発する。鈍い見行者は、楽行道遅通達のために、勤根によって〔四〕正勤によって出発する。鋭い見行者は、楽行道速通達のために、慧根によって〔四〕諦によって出発する。

両者の〔鈍い・鋭い〕渴愛行者たちは、貪欲捨離のために、心解脱のために、止を先行させる観によって導かれる。両者の〔鈍い・鋭い〕見行者たちは、無明捨離のために、慧解脱のために、観を先行させる止によって導かれる。

ここでは、「渴愛行者」が「貪欲捨離と心解脱」のために「止を先行させる観」によって導かれる。一方、「見行者」は「無明捨離と慧解脱」のために「観を先行させる止」によって導かれる。この「止を先行させる観の修習」と「観を先行させる止の修習」の二道はそれぞれ別箇のものとして説明されるが、何れにせよ「略解による智者」(ugghaṭṭitaññū) に対してである⁶⁹ため、この二つの修習次第は、平等で差異がないといえる。

以上から見れば、「止行者」は「止を先行させる観を修習する者」に相当し、「観行者」は「観を先行させる止を修習する者」に相当すると見なされる。「止を先行させる観の修習」・「観を先行させる止の修習」の表現は、阿

舎・ニカーヤからアビダンマ文献と註釈文献との中間時代の文献である『導論』・『藏釈』まで現れたが、註釈文献時代に入ると消えてしまった。一方、「止行者」・「観行者」の表現は、註釈文献時代以前には見られない。したがって、阿舎・ニカーヤ時代から「止を先行させる観を修習する者」・「観を先行させる止を修習する者」の表現を受け継いで、註釈文献時代に「止行者」・「観行者」に展開していったと考えられる。

IV. 〈止〉としての〈定〉の展開

以上、註釈文献における「止行者」は「四禪」・「無色定」の段階に至る「安止定」か「四禪」に至らない「近行定」を修習するものに対して、「観行者」は「安止定」・「近行定」より下位の「刹那定」を修習するものであると判明した。また、「止行者」・「観行者」は、初期経典の阿舎・ニカーヤにおける「止を先行させる観を修習する者」・「観を先行させる止を修習する者」の表現から展開したと明らかになった。ただし、その「止」としての「定」すなわち「安止定」・「近行定」・「刹那定」はどのような展開があるのか、未だ判明していないため、これよりその展開を考察する。

初期経典の阿舎・ニカーヤにおいては、止観は現れているが、その定義は明瞭に説かれない。そのため、阿舎・ニカーヤに用いられる止観の定義を理解するには、止観の用例を通じて検討せざるを得ない。「止」とは「心」(citta)を修習することであり、「観」とは「慧」(paññā)を修習することであって、「止」を修習すれば、食欲が捨断され、「観」を修習すれば、無明が捨断されるとするのである。そして、「心寂止」(cetosaṃatha)及び「増上慧法観」(adhīpaññādhāmmavipassanā)も見られる⁽⁹⁾。この観点から、「止」は戒・定・慧の三学でいえば「定」(samādhi)、すなわち「増上心学」(adhicittasikkhā)に相当する。これに対して、「観」は「定」と不離の関係にある「慧」、すなわち「増上慧学」(adhīpaññāsikkhā)に相当すると考えられる。また、ときに「止」は「定」のかわりに、「観」は「慧」の

かわりに用いられるところもある。このように、初期經典の阿含・ニカーヤにおける「止」は「定」、すなわち「増上心学」に相当する。これに対して、「観」は定と不離の関係にある「増上慧学」に相当すると考えられる。

では「増上心学」とは何を指すのか、阿含・ニカーヤにおいては以下のように説かれる。

Katamā ca bhikkhave adhicittasikkhā?

Idha bhikkhave bhikkhu vivicc' eva kāmehi... pe... catutthajhānaṃ upasampajja viharati. Ayaṃ vuccati bhikkhave adhicittasikkhā. (AN. I. 235)¹⁹

比丘たちよ、増上心学とは何であるか。

比丘たちよ、ここに比丘は諸々の欲望から離れ……第四禪を具足して住する。比丘たちよ、これが増上心学といわれる。

ここで、「増上心学」は「四禪」を指す。ちなみに、初期の時代において「止」は「四禪」に至る境地である。また、漏・煩惱を捨断するために、少なくとも「初禪」の段階に到達したことがAN.9. 4 *Mahā-vagga* 36 *Jhāna*において、以下のように述べられている。

Pathamam p' ahaṃ bhikkhave jhānaṃ nissāya āsavānaṃ khayaṃ vadāmi, dutiyam p' ahaṃ bhikkhave jhānaṃ nissāya āsavānaṃ khayaṃ vadāmi, tatiyam p' ahaṃ bhikkhave jhānaṃ nissāya āsavānaṃ khayaṃ vadāmi, catuttham p' ahaṃ bhikkhave jhānaṃ nissāya āsavānaṃ khayaṃ vadāmi, ākāsānañcāyatanam p' ahaṃ bhikkhave nissāya āsavānaṃ khayaṃ vadāmi, viññānañcāyatanam p' ahaṃ bhikkhave nissāya āsavānaṃ khayaṃ vadāmi, ākīñcaññāyatanam p' ahaṃ bhikkhave nissāya āsavānaṃ khayaṃ vadāmi, nevasaññānāsaññāyatanam p' ahaṃ bhikkhave nissāya āsavānaṃ

khayaṃ vadāmi. (AN. IV. 422)

比丘たちよ、私は初禪に依りて諸々の煩惱が滅尽されることを説く。
 比丘たちよ、私は第二禪に依りて諸々の煩惱が滅尽されることを説く。
 比丘たちよ、私は第三禪に依りて諸々の煩惱が滅尽されることを説く。
 比丘たちよ、私は第四禪に依りて諸々の煩惱が滅尽されることを説く。
 比丘たちよ、私は空無辺処に依りて諸々の煩惱が滅尽されることを説く。
 比丘たちよ、私は識無辺処に依りて諸々の煩惱が滅尽されることを説く。
 比丘たちよ、私は無所有処に依りて諸々の煩惱が滅尽されることを説く。
 比丘たちよ、私は非想非非想処に依りて諸々の煩惱が滅尽されることを説く。

上述のように、漏・煩惱を捨断するために、少なくとも「初禪」の段階に到達しなければならないことが明らかになった。それ故に、阿含・ニカーヤにおいて「止」は「四禪」の段階に至る「定」を指している。

そして、次代に成立した『無礙解道』(Paṭisambhidāmagga²¹)において阿含・ニカーヤで明瞭に説かれていない止観の定義は、はじめて明確化されるようになった。『無礙解道』でよく見られるのは、「止」を「心の一境性」(cittassa ekaggatā²²)・「不散乱」(avikkhepa²³)であると説明するものである。また、アビダンマ文献の中、「止」の定義に関する記述は初期論書²⁴としての『法集論』(Dhammasaṅgāṇi)「概説品」(Nikkhepa-kaṇḍa)において

Tattha katamo samatho?

Yā cittassa ṭhiti saṅṭhiti avaṭṭhiti avisāhāro avikkhepo avisāha-
 ṭamānasatā samatho samādhindriyaṃ samāhibalaṃ sammāsamādhi
 — ayaṃ vuccati samatho. (Dhs. §1355)

止とは何であるか。

心の住立、定立、確立、平衡、不散乱、意の安定、止、定根、定力、正定、これが止といわれる。

と説かれる。ここで、「定根」(samādhindriya) や「定力」(samādhibala)、⁰⁹「正定」(sammāsamādhi) などを「止」という、と述べられる。さらに、アビダンマ文献には、ニカーヤから引用したと見られるものに止観への言及がある。そこで、「心寂止」は「色俱行か、無色俱行かの等至」(rūpasahagatānaṃ vā arūpasahagatānaṃ vā samāpattinaṃ) となる、と説明されるので、「止」は「四禪」と「無色定」を指すことが明らかになった。

最後に、三蔵に対する諸註釈文献における止観の定義は、『無礙解道』やアビダンマ文献と同様に本質的に変わらないが、定型句による表現が見られないという点で異なる。「止」は「定」、⁰⁹「等至」(samāpatti)、「心修習」(cittabhāvanā)、「増上心」などと定義される。また前述のように、この註釈文献時代において、現代上座仏教界がよく用いる「止行者」・「観行者」という二行者、及び「安止定」・「近行定」・「刹那定」という三定が新たな術語として現れるようになった。

以上、初期經典から註釈文献に至るまでの「止」としての「定」を考察した。初期經典及びアビダンマ文献における「止」は「四禪」・「無色定」を指す。これに対して、註釈文献においても「止」は「四禪」・「無色定」を指すことを受け継ぎ、またこれを加えて「四禪」に至らない二段階の「定」、すなわち「安止定」・「近行定」・「刹那定」という三定の新たな術語が現れるようになった。つまり「四禪」を必要とするのは、初期の思想であり、一方「四禪」を必要とせずに「刹那定」を指すのは、註釈文献時代の思想であると考えられる。

V. 現代タイ仏教界の瞑想法と止観の観点

以上、初期經典から註釈文献に至るまでの「止行者」・「観行者」という二行者、及び「安止定」・「近行定」・「刹那定」という三定の展開を明らかにした。これより、その検討の結果に基づいて現代タイ仏教界の瞑想法と止観の

観点を考察する。そのため、現代タイ上座仏教において止観を指導している寺院 ① マハーターツ寺院系、② 東北地方寺院系、③ バクナム寺院系の瞑想法と止観の観点を事例をあげて考察する。⁶⁹

① マハーターツ寺院系の瞑想法は、「ウィパッサナー瞑想」といわれるが、「止・観」両方を修習する。まず、「死随念」(maraṇānussati)や「仏随念」(buddhānussati)などを「止」として先に行じて「観」の段階に入る以前の段階となる。⁷⁰次に、DN. 22 *Mahāsatipaṭṭhāna-suttanta*⁷¹やMN. 10 *Satipaṭṭhāna-sutta*⁷²に基づき、「四念処」にある「身随観念処」(kāyānupāsana-satipaṭṭhāna)の中に記述されるすべての行動を行う中で常に感覚や意識を持っていなければならない。あちらこちらに気移りさせてはいけない。そのため、すべての行動を心の中で念じ続けることが「観」の修習に属するとされている。この瞑想法では、息を吸い、腹部が膨らんでいく時には「膨らむ」と念じる。息を吐き、腹部が縮んでいく時には「縮む」と念じる。腹部の膨縮を常に認識していることを「身随観念処」と呼ぶ。このように実践し続けると「観智」(vipassanā-ñāṇa)が生じて、最後に預流・一來・不還・阿羅漢となる。ただし、マハーターツ寺院系の「観」は「近行定」や「安止定」によらず、ただ「刹那定」の修習だけを重要視している。⁷³

② 東北地方寺院系は、MN. 118 *Ānāpānasati-sutta*⁷⁴に基づき「出入息念」(ānāpānasati)を中心とした瞑想であるが、「ブットー」(buddho仏)と念じる「仏随念」(buddhānussati)が特色となっている。「出入息念」と共に「仏随念」と念じる瞑想法では、息を吸い込む時に「ブッ」、吐き出す時に「トー」と念じる。呼吸と同時に「ブットー」と念じることで、簡単に心を集中させることができる。このような瞑想法は「止」を修行する段階であり、「観」の段階へ移る入り口となる。この瞑想法は、坐る瞑想と歩く瞑想にも対応している。この寺院系の瞑想法は、戒定慧に基づいて修習されている。「戒」は身体の行為を修習し、「定」は心を清らかに修習し、「慧」は物事の無常・苦・無我を了知することである。修行の最中には、欲望が沸き起らないように「足るを知る」を基本として生活する。「ブットー」と唱えるこ

とによって、心を明るく穏やかにさせ、「一境性」(ekaggatā)に至る。ここに至ると「五蓋」を抑える「四禪」になる。これは「止」の段階である。この「止」が消えると苦しみが沸き起こる。しかし、この「止」は最高の目的ではなく、さらなる目的が存在する。その目的を達するために「止」を必要とするが、決して「止」に執着してはならない。⁶⁵そして、物事のありのままである「無常・苦・無我」を了知する「智」により煩惱を捨断し、預流・一來・不還・阿羅漢という四沙門となる。これは「観」の段階である。

③ パクナム寺院系の瞑想法は、止観両方を重要視している。かつて、AN. 2.3 *Bāla-vagga* 10を挙げて止観を説いていた。それに加え「止」は初級であり、心を静止させること、「観」は上級であり、明らかに観じることであると定義付けた。瞑想修行をするには、まず「光明遍」(āloka-kasiṇa)と「仏随念」(buddhānussati)を交えて、心を落ち着かせる「止」の修習を初心者に指導する。「光明遍」と「仏随念」を交える瞑想法では、瞑想の対象として透明で傷のない「水晶玉」(= 光明遍)や「仏像」(= 仏随念)を身体を中心に置き、そこに意識を集中させる。そして、「サンマー・アラハン」(sammā araham)と心の中でゆっくりと繰り返し唱える。瞑想の対象が見えなくても、「サンマー・アラハン」と唱え続ける。そして「四禪」または「無色定」の段階である「止」を達成した者に、より深い瞑想に入る「観」の瞑想法を指導する。「観」の修習は「四禪」または「無色定」に至った後の「法身」(dhammakāya)⁶⁷に到達した時から始まる。すなわち、頭で考えたり、思ったりするのではなく、法身の法眼(dhammacakkhu)によって五蘊・十二処・十八界・二十二根・四聖諦・十二支縁起を観じつつ、十結及び煩惱を捨断し、預流・一來・不還・阿羅漢という四沙門果に順に到達することである。「止」に続いて「観」を完全に修習したことになり、止観の両方を重要視する。

以上、マハーターツ寺院系の瞑想法は、*Mahāsatiṭṭhāna-suttanta*や*Satiṭṭhāna-sutta*に基づいて、四念処を指導しているが、後代の註釈文献の解釈と同様に「安止定」や「近行定」に至らない「刹那定」により「観」

を修習する「観行者」の瞑想法であると明らかになった。一方、東北地方寺院系とパクナム寺院系の瞑想法は、「四禪」または「無色定」に到達する「止」を先行させ「観」を修習するという観点から瞑想修行を行っている。つまり、この瞑想法は「安止定」を修習した後に「観」を修習する「止行者」瞑想法であり、初期經典の修行法であると明らかになった。

VI. 結 論

本稿「止行者と観行者の対立 —現代タイ仏教界の瞑想法をめぐって—」は、止観に対する観点、特に「四禪」の必要性が「止行者」・「観行者」の対立の原因であることを念頭において、初期經典から註釈文献に至るまでのパリー文献を精査し、両行者の現代の実践とともに、文献的、実践的に証明し論じたものである。また、その結果をもって現代タイ仏教における両行者の対立をめぐる問題を解決させたいと望んでいた。そして、以下の結論に到達することができた。

①「止行者」・「観行者」と、「安止定」・「近行定」・「刹那定」との関係は、註釈文献時代においてBuddhaghosaの『清浄道論』では「止行者」は「四禪」・「無色定」の段階に至る「安止定」を修習するものであるが、「観行者」はどの段階に至るかが判明してない。その後、Dhammapālaの『清浄道論註』では「止行者」は「安止定」だけでなく「四禪」に至らない「近行定」を修習するものに対して、「観行者」は「安止定」・「近行定」より下位の「刹那定」を修習するものである。

②「止行者」は「止を先行させる観を修習する者」に相当し、「観行者」は「観を先行させる止を修習する者」に相当すると見なされる。「止を先行させる観の修習」・「観を先行させる止の修習」の表現は、阿含・ニカヤからアビダンマ文献と註釈文献との中間時代の文献である『導論』・『歳釈』まで現れたが、註釈文献時代に入ると消えてしまった。一方、「止行者」・「観行者」の表現は、註釈文献時代以前に見られない。したがって、阿含・ニカ

一や時代から「止を先行させる観を修習する者」・「観を先行させる止を修習する者」の表現を受け継いで、註釈文献時代に「止行者」・「観行者」に展開していったと考えられる。

③ 初期經典から註釈文献に至るまでの「止」としての「定」を考察した。初期經典及びアピダンマ文献における「止」は「四禪」・「無色定」を指す。これに対して、註釈文献においても「止」は「四禪」・「無色定」を指すことを受け継ぎ、またこれを加えて「四禪」に至らない二段階の「定」、すなわち「安止定」・「近行定」・「刹那定」という三定の新たな術語が現れるようになった。つまり「四禪」を必要とするのは、初期の思想であり、一方「四禪」を必要とせずに「刹那定」を指すのは、註釈文献時代の思想であると考えられる。

④ マハーターツ寺院系の瞑想法は、*Mahāsatiṭṭhāna-suttanta* や *Satipaṭṭhāna-sutta* に基づいて、四念処を指導しているが、後代の註釈文献の解釈と同様に「安止定」や「近行定」に至らない「刹那定」により「観」を修習する「観行者」の瞑想法であると明らかになった。一方、東北地方寺院系とパクナム寺院系の瞑想法は、「四禪」または「無色定」に到達する「止」を先行させ「観」を修習するという観点から瞑想修行を行っている。つまり、この瞑想法は「安止定」を修習した後に「観」を修習する「止行者」瞑想法であり、初期經典の修行法であると明らかになった。

以上、何れの寺院系の瞑想法でも上座部文献に基づいて指導している。註釈文献に見られる「止行者」であれ「観行者」であれ、初期の思想に遡ることができる。また、両行者の対立の原因となった「四禪」の必要性については、正誤問題ではなく、ただ違う時代の文献を取り扱ったゆえの問題であった。すなわち、「四禪」を必要とするのは、初期の思想であるが、「四禪」を必要とせずに「刹那定」を必要とするのは、註釈文献時代の思想なのである。

略号及び参考文献

PTS = Pali Text Society

大正 = 大正新脩大藏經

- AN* = *Aṅuttaranikāya*, R. Morris (ed.), A. K. Warder (rev.), vol.I, London: PTS, 1885, rep. Oxford: PTS, 1989 ; R. Morris (ed.), vol.II, London: PTS, 1888, rep. Oxford: PTS, 1995; E. Hardy (ed.), vol.III-V, London: PTS, 1897-1900, rep. London: PTS, 1976-1979.
- DA* = *Dīghanikāya Commentary (Sumaṅgalavilāsini)*, T. W. Rhys Davids and J. Estlin Carpenter (ed.), vol.I, London: PTS, 1929, rep. London: PTS, 1968 ; W. Stede (ed.), vol. II-III, London: PTS, 1931-1932, rep. London: PTS, 1970-71.
- Dhs* = *Dhammasaṅgaṇi*, E. Müller (ed.), London: PTS, 1885, rep. London: PTS, 1978.
- DN* = *Dīghanikāya*, T. W. Rhys Davids and J. E. Carpenter (ed.), vol.I-II, London: PTS, 1889-1903, rep. London: PTS, 1995; J. E. Carpenter (ed.), vol. III, London: PTS, 1911, rep. Oxford: PTS, 1992.
- MA* = *Majjhimanikāya Commentary (Paṇācasūdanī)*, J. H. Woods and D. Kosambi (ed.), vol.I-II, London: PTS, 1922-1928, rep. London: PTS, 1979-1983 ; I. B. Horner (ed.), vol.III-V, London: PTS, 1933-1938.
- MN* = *Majjhimanikāya*, V. Trenckner (ed.), vol.I, London: PTS, 1888, rep. Oxford: PTS, 1993 ; R. Chalmers (ed.), vol.II-III, London: PTS, 1896-1899, rep. Oxford: PTS, 1993-1994.
- Net* = *Nettipakarāṇa*, E. Hardy (ed.), London: PTS, 1902, rep. London: PTS, 1961.
- Pe* = *Peṭakopadesa*, A. Barua (ed.) London: PTS, 1949, rep. London: PTS, 1982.
- Pṭs* = *Paṭisambhidāmagga*, A. C. Taylor (ed.), London: PTS, 1905-1907, rep. London: PTS, 1979.
- PṭsA* = *Paṭisambhidāmagga Commentary (Saddhammappakāsini)*, C. V. Joshi (ed.), vol.I-III, London: PTS, 1933-1947.
- Pug* = *Puggalapāṇṇatti with Commentary (Paramatthadīpanī)*, R. Morris and G. Landsberg and C. A. F. Rhys Davids (ed.), London: PTS, 1914, rep. London: PTS, 1972.
- SN* = *Samyuttanikāya*, G. A. Somaratne (ed.), vol.I, Oxford: PTS, 1999 ; L. Feer (ed.), vol.II-V, London: PTS, 1888-1898, rep. London/ Oxford: PTS, 1976-1994.
- Vis* = *Visuddhimagga of Buddhaghosācariya*, H. C. Warren (ed.), Dharmananda Kosambi (rev.), Harvard Oriental Series, Cambridge/Mass.: Harvard University Press, 1950, rep. Delhi, 1989.

VisT = *Visuddhimagga-Mahāṭikā (Paramatthamañjūsā)*, vol.I-III, Bangkok: Bhūmibalo Bhikkhu Foundation Press, 1985.

- 金宰晟 [1995] 「『清浄道論』における刹那定と近行定 —SamathayānaとVipassanāyānaの接点—」『インド哲学仏教学研究』3, 東京: 東京大学文学部インド哲学仏教学研究室, pp.3-16.
- 金宰晟 [2003] 「慧解脱について」『印度学仏教学研究』51-2, 東京: 日本印度学仏教学会, pp.831-827.
- 佐藤密雄 [1975] 「清浄道論に於ける止観」『止観の研究』東京: 岩波書店, pp.113-138.
- 中村元 [1975] 「原始仏教における止観」『止観の研究』東京: 岩波書店, pp.35-49.
- 水野弘元 [1964] 『パーリ仏教を中心とした仏教の心識論』東京: 山喜房仏書林.
- 水野弘元 [1997] 『パーリ論書研究: 水野弘元著作選集 第二巻』東京: 春秋社.
- 水野弘元 (他) [2001] 『仏典解題事典 一新・仏典解題事典 第二版一』東京: 春秋社.
- 森祖道 [1982] 「業処説の種々相」『仏教教理の研究: 田村芳朗博士還暦記念論集』東京: 春秋社, pp.127-140.
- 森祖道 [1984] 『パーリ仏教註釈文献の研究』東京: 山喜房佛書林.
- Bronkhorst, J. [1986] *The Two Traditions of Meditation in Ancient India*, Stuttgart: Steiner-Verlag-Wiesbaden-GmbH.
- Cousins, Lance S. [1984] "Samatha-yāna and Vipassanā-yāna," *Buddhist studies in Honour of Hammalava Saddhātissa*, Nugegoda: University of Jayewardenepura, pp.56-68.
- Cousins, Lance S. [1996] "The Origins of Insight Meditation," *The Buddhist Forum IV*, ed. By Tadeusz Skorupski, New Delhi: Heritage Publishers, pp.35-58.
- Griffiths, P. [1981] "Concentration or Insight: The problematic of Theravāda Buddhist Meditation Theory," *The Journal of the American Academy of Religion* 49/4, pp.606-624.
- Schmithausen, L. [1981] "On Some Aspects of Descriptions or Theories of 'Liberating Insight' and 'Enlightenment' in Early Buddhism," *Studien zum Jainismus und Buddhismus*, Wiesbaden: Steiner-Verlag-Wiesbaden-GmbH, pp.199-250.
- Vetter, T. [1988] *The Ideas and Meditative Practices of Early Buddhism*, Leiden: E. J. Brill.

- Phrapongsak, K. [2007] 「Nikāyaにおける止観の研究」『龍谷大学大学院文学研究科紀要』29, 京都：龍谷大学大学院文学研究科紀要編集委員会, pp.80-98.
- Phrapongsak, K. [2009a] 「後代パーリ文献における止観」『仏教学研究』65, 京都：龍谷仏教学会, pp.51-77.
- Phrapongsak, K. [2009b] 「〈止行者・観行者〉と〈定〉について」『パーリ学仏教文化学』23, 名古屋：パーリ学仏教文化学会, pp.5-20.
- Phrapongsak, K. [2010] 「現代タイ仏教における止観の実践法」『パーリ学仏教文化学』24, 名古屋：パーリ学仏教文化学会, pp.69-91.
- プラクルーパーワナーモンコン (พระครูภาวนามงคล) [2003] (2546) 『法身の軌跡 (ตามรอยธรรมกาย)』バンコク：S.P.K. Paper & Form.
- プラタンマティーラートマハームニー (พระธรรมธีรราชมานุนี) [2003] (2546) 『止・観瞑想の修行法 (หลักปฏิบัติสมถะและวิปัสสนากรรมฐาน)』バンコク：サハッタタミ.
- プラパーワナーウィリヤクン (พระภาวนาวิริยคุณ) [1997] (2540) 『真の僧侶 (พระแท้)』パトナムターニー：タンマガイ財団.
- プラポーティヤーナテラ (พระโพธิญาณเถระ) [2007] (2550) 『修習のカギ (กุญแจความรู้)』バンコク：プラポーティヤーナテラの教え布教センター.
- マハーチュラーロンコーン仏教大学(มหาวิทยาลัยมหาจุฬาลงกรณราชวิทยาลัย) [2008a] (2551) 『瞑想実践法1 (ธรรมะภาคปฏิบัติ ๑)』バンコク：マハーチュラーロンコーン大学.
- マハーチュラーロンコーン仏教大学(มหาวิทยาลัยมหาจุฬาลงกรณราชวิทยาลัย) [2008b] (2551) 『瞑想実践法2 (ธรรมะภาคปฏิบัติ ๒)』バンコク：マハーチュラーロンコーン大学.
- ワリヤー・シナワンノー (他) (วิชา จินวรรโณ) [2005] (2548) 『三蔵における三昧一タイ上座仏教における三昧の解釈の展開— (สมาธิในพระไตรปิฎก วิวัฒนาการตีความคำสอนเรื่องสมาธิในพระพุทธศาสนาฝ่ายเถรวาทในประเทศไทย)』バンコク：チュラーロンコーン大学.
- ※ 西暦の後ろの () 内の数字は、タイで使用されている仏暦である。

註

- (1) 2000年に行われた大長老会議にて、瞑想指導所は登録を義務付けられ、こうして登録された瞑想指導所は2010年6月7日現在、全国で1151ヶ所ある。タイ国仏教事務局の『全国瞑想指導所登録書』(電子版：<http://www.onab.go.th>) 参照。
- (2) 『清浄道論』(Visuddhimagga) は5世紀の中葉、インドの学僧Buddhaghosaが大寺派(Mahāvihāra)において当時存在していたシンハラ語で書かれた三蔵の註釈書を参照し、『解脱道論』(Vimuttimagga)を底本として、大寺派教学の正統説を祖述する立場からこれを改造増補して作ったものである(水野弘元(他) [2001: 122] 参照)。三蔵の註釈書、特に現存「四部註」と『清浄道論』との成立の順は、引用関係から判断して、①『清浄道論』→②

『長部註』 (*Dīghanikāya-Aṭṭhakathā: Sumaṅgalavilāsini*) → ③ 『中部註』 (*Majjhimanikāya-Aṭṭhakathā: Papañcasūdanī*) → ④ 『相应部註』 (*Saṃyuttanikāya-Aṭṭhakathā: Sāratthappakāsini*) → ⑤ 『增支部註』 (*Aṅguttaranikāya-Aṭṭhakathā: Manorathaparaṇi*) の順で作成された (森祖道 [1984: 92-104] 及び馬場紀寿 [2008: 14-15] 参照)。

- (3) §2. Catudhātuvavatthānassa bhāvanā (*Vis.* 347-370)
- (4) 四十業処 (kammaṭṭhāna) : ① 十遍 (kaṣiṇa), ② 十不淨 (asubha), ③ 十随念 (anussati), ④ 四梵住 (brahmavihāra), ⑤ 四無色 (ārūpa), ⑥ 食厭想 (āhāre paṭikūlasaññā), ⑦ 四界差別 (catudhātu vavatthāna)
- (5) Tattha upacārabhūmiyaṃ nīvaraṇappahānena cittiyaṃ samāhitaṃ hoti, (*Vis.* 126)
- (6) *Vis.* 144
- (7) *Vis.* 144 ; 大正. 32. 414c
- (8) *Vis.* 85, 371
- (9) Dhammapālaの年代について明確な手がかりは得られないが, Buddhaghosaより後代の人であったことは確かである。最近の説としては, Pierisは6世紀後半 (または7世紀初頭) としており, Normanは多分6世紀中頃ではないかと述べている。森祖道 [1984: 537-538] 参照。
- (10) *Vis.* III. 449
- (11) *Vis.* III. 450
- (12) *Vis.* I. 17
- (13) *DA.* III. 754 ; *MA.* I. 239 ; *PīṣA.* III. 696
- (14) Ito bahiddhā te pabbajitā taṇhācaritā kāmasukhallikānuyogaṃ anuyuttā viharanti. Tena ye ca nissandena diṭṭhacaritā attakilamathānuyogaṃ anuyuttā viharanti. (*Pe.* 242-243)
- (15) *SN.* 56. 11 *Tathāgatena vutta* 1: Dve me bhikkhave anta pabbajitena na sevittabbā, Katame dve. Yo cāyaṃ kāmesu kāmesu khallikānuyogo hino gammo puthujjaniko anariyo anattasaṃhito, yo cāyaṃ attakilamathānuyogo dukkho anariyo anattasaṃhito. (*SN.* V. 421), 『中阿含』 56 『羅摩經』: 當知有二邊行。諸為道者所不當學。一曰著欲樂下賤業凡人所行。二曰自煩自苦。非賢聖求法。無義相應。(大正. 1. 777c), 『轉法輪經』: 世間有二事墮邊行。行道弟子捨家者。終身不當與從事。何等二。一為念在貪欲無清淨志。二為著身愛不能精進。(大正. 2. 503b) など。
- (16) Tattha ugghaṭitaññussa samathapubbaṅgamā vipassanā neyyassa vipassanā pubbaṅgamo samatho. (*Pe.* 249)
- (17) *AN.* 2. 3 *Bāla-vagga* 10

Dve 'me bhikkhave dhammā vijjābhāgiyā.

Katame dve?

Samatho ca vipassanā ca. Samatho ca bhikkhave bhāvito kam attham anubhoti? Cittaṃ bhāviyati. Cittaṃ bhāvitaṃ kaṃ atthaṃ anubhoti? Yo rāgo so pahiyati.

Vipassanā bhikkhave bhāvitā kam atthaṃ anubhoti? Paññā bhāviyati. Paññā bhāvitā kam atthaṃ anubhoti? Yā avijjā sā pahiyati: rāgupakkiliṭṭhaṃ vā bhikkhave cittaṃ na vimuccati avijjupakkiliṭṭhā vā paññā na bhāviyati. Imā kho bhikkhave rāgavirāgā cetovimutti avijjāvirāgā paññāvimutti ti. (AN. I. 61)

比丘たちよ、これらの二つの法は明を分有するのである。

二つとは何であるか。

止と観とである。比丘たちよ、そして止が修習されたならば、いかなる利益を受けるであろうか。〔それは〕心が修習されるのである。心が修習されたならば、いかなる利益を受けるであろうか。〔それは〕いかなる貪欲でも捨断されるのである。

比丘たちよ、観が修習されたならば、いかなる利益を受けるであろうか。

〔それは〕慧が修習されるのである。慧が修習されたならば、いかなる利益を受けるであろうか。〔それは〕いかなる無明でも捨断されるのである。比丘たちよ、貪欲に汚された心は解脱しない。無明に汚された慧は修習されない。比丘たちよ、これらは貪欲を離れた心解脱といい、無明を離れた慧解脱という。

この經典に相当する漢訳『増一阿含』20.7においては「阿練比丘當修行二法。云何二法。所謂止與觀也。若阿練比丘得休息止。則戒律成就不失威儀。不犯禁行作諸功德。若復阿練比丘得觀已。便觀此苦如實知之。觀苦習觀苦盡觀苦出要如實知之。彼如是觀已。欲漏心解脱有漏心無明漏心得解脱」(大正2. 600a-b)と説かれるが、パーリ經典のように詳細に説明されない。

(18) AN.10. 6 *Sacitta-vagga* 54 *Samatha*

Sace pana bhikkhave bhikkhu paccavekkhamāno evaṃ jānāti: lābhi 'mhi ajjhataṃ cetosamathassa, lābhi adhipaññādhammavipassanāyā ti, tena bhikkhave bhikkhunā tesu yeva kusalesu dhammesu patitṭhāya uttarim āsavānaṃ khayāya yogo karaṇiyo. (AN. V. 100)

比丘たちよ、もし比丘が観察して次のように知るとしよう。「〔私は〕内に心寂止を得た。増上慧法観を得た」と。比丘たちよ、その比丘はそれらの善法(心寂止と増上慧法観)において住し、さらに煩惱の滅尽のために修行すべきである。

この經典に相当する漢訳『中阿含』109 自観心経においては「若比丘觀已。

則知我得內止。亦得最上慈觀法。彼比丘住此善法已。當求漏盡智通作證」(大正1. 598c) と説かれる。この經典以外、相当する阿含經はないが、ニカーヤのみに説かれる場合はAN.4. 10 *Asura-vagga* 92 (AN. II. 92) などにおいて *cetosamatha* と *adhīpaññādharmavipassanā* が述べられる。

- (19) *catuṭṭha-* を *catuttha-* に訂正。
- (20) AN.3. 9 *Samāna-vagga* 88: 『雜阿含』817「何等為增上意學。若比丘。離欲惡不善法。乃至第四禪具足住」(大正2. 210a): 『雜阿含』832「何等為增上意學。若比丘。離諸惡不善法。有覺有觀。離生喜樂。初禪具足住。乃至第四禪具足住。是名增上意學」(大正2. 213c)。
- (21) 『無礙解道』(*Paṭisambhidāmagga*) は『小部』(*Khuddakanikāya*) 中に撰められ「經藏」に属するが、内容形式ともに論書であり、後代の諸論書とも大関係があり、漢訳『解脫道論』の如きは、本書を「阿毘曇」と称してしばしば引用しているので、本書はアビダンマに属するとされた場合もあり、15世紀の諸書の刻文においても『清淨道論』(*Visuddhimagga*) の直前に置かれている(水野弘元 [1997: 190] 参照)。
- (22) *cittass' ekaggatā avikkhepo samathabalaṃ* (*Pṭs.* I. 97-98; II. 172), *cittaṃ ekagganti samathabalaṃ* (*Pṭs.* II. 176) など。
- (23) *samathassa avikkhepaṭṭho* (*Pṭs.* I. 16), *samathassa avikkhepaṭṭhaṃ* (*Pṭs.* II. 119), *avikkhepaṭṭhena samatho* (*Pṭs.* I. 21, 74; II. 85, 90, 143, 161) など。
- (24) パーリのアビダンマについてこれを見るならば、パーリ七論はその表現形式及び教理内容から見て、大体これを、① 初期論書: 『人施設論』(*Puggalapaññatti*)、『分別論』(*Vibhaṅga*) 中の「經分別」(*suttanta-bhājanīya*) の部分、『法集論』(*Dhammasaṅgaṇī*) の一部分、② 中期論書: 『法集論』、『分別論』中の「論分別」(*abhidhamma-bhājanīya*)・「問分」(*pañha-pucchaka*) の部分、③ 後期論書: 『界説論』(*Dhātukathā*)、『双論』(*Yamaka*)、『発趣論』(*Paṭṭhāna*)、『論事』(*Kathāvatthu*) の3段階に分けるこおとができる(水野弘元 [1964: 21-23] 参照)。
- (25) これに対応する文は『集異門足論』にある。「如説世間四靜慮相應。心住等住近住安住。不散不亂攝止等持。心一境性者。此顯內心止。……是名奢摩他……」(大正. 26. 375c)
- (26) AN.4. 10 *Asuravagga* 92 (AN. II. 92)
- (27) *Pug.* 62
- (28) 「定」(*DA.* III. 983; *PṭsA.* I. 125), 「等至」(*MA.* II. 346), 「心修習」(*MA.* II. 284) など。
- (29) 各寺院の沿革及び詳細な実践法については、龍谷大学アジア仏教文化研究

センターの2012年度ワーキングペーパー (No.1) 『タイ上座仏教における瞑想実践法の現在』(電子版：<http://barc.ryukoku.ac.jp/research/working-paper/>) を参照。

- (30) プラタンマティーララートマハームニー [2007:48-54] 参照。
- (31) *DN*, II. 290-315
- (32) *MN*, I. 55-63
- (33) 「観」の修習は「五根」のバランスを取るのが重要とされるため、「止」だけを修習し続けて、「近行定」あるいは「安止定」に至るのであれば、ただ「定根」のみを得ることしかできない。残りの「信根・勤根・念根・慧根」は僅かに生じる場合もあるが、生じない場合もある。「止」のみの修習では、このように「五根」のバランスを取ることができないのである。それ故に「観」の修習は、「近行定」または「安止定」に依らず、瞬間的な「刹那定」のみを修習する。マハーチュラーロンコーン大学 [2008b:136] 参照。
- (34) *MN*, III. 78-88
- (35) プラポーティヤーナテーラ [2007:5-6] 参照。
- (36) *AN*, I. 61
- (37) 「法身 (dhammakāya)」は、悟りの身体であり、すべての人間のうちに存在する覚性である。プラパーワナーウィリヤクン [1997:317] 参照。また、初期経典から後代パーリ文献における「法身」に関する記述は、プラクルーパーワナーモンコン [2003:63-436] が詳細にまとめている。

キーワード 止行者、観行者、四禪、瞑想法、タイ仏教

いつもお世話になっており、研究者の知識や常識などを親しく教えて下さった恩師桂紹隆先生には、言葉に言い表せない程の感謝の念でいっぱいである。貴重なご意見やアドバイスがなければ、この日まで来ることは出来なかったであろう。この度、改めて心から御礼申し上げる。

(本稿は、2012年度龍谷大学アジア仏教文化研究センター公募研究補助金による研究成果の一部である)